

注目の遺跡 上ノ国町洲崎館跡

5.1 2 例目の懸仏

史跡上之国館跡のうち洲崎館跡（上ノ国町）の発掘調査で、昨年度に花沢館跡で発見された北海道初の懸仏（如意輪観音）に続き、北海道で2例目となる懸仏が出土しました。



図 5.1 懸仏の出土状況

懸仏は「御正体」（みしょうたい）とも呼ばれ、仏が仮に神の姿となって救済のため現れるという神仏習合の思想を体現し、吊るすための穴や鑲座が付いた鏡板に仏像等を線刻もしくは貼付したものです。

5.2 洲崎館跡

洲崎館跡は、長禄元年（1457）のコシャマインの戦いを収束させた武田信広によって天の川河口右岸に築かれた中世城館です。同年に信広は、蠣崎季繁の養女（下国安藤政季の娘）と結



図 5.2 国指定史跡洲崎館跡全景

婚し、寛正3年（1462）に砂館神社の前身である、毘沙門金像を納めた毘沙門堂を建立しています（『新羅之記録』所収）。毘沙門堂は、安永7年（1778）の火災で本殿・拝殿ともに焼失し、松前藩によって翌年再建され、明治4年（1871）の神仏分離の際に砂館神社と改称しています。

5.3 北方を護る毘沙門天

懸仏は、砂館神社西側の第3調査区で1640年降下の駒ヶ岳d火山灰（Ko-d）より下位に位置する中世の遺物包含層から出土しました。大きさは高さ8.2cm × 幅4.0cm × 厚1.0cmで左手の持物や鏡板は欠損していますが、甲冑を表す刻み模様や須弥山をイメージした岩座に立つ姿から毘沙門天と考えられます。懸仏の製作年代



図 5.3 洲崎館跡出土の懸仏

は、類例などから 14 ～ 15 世紀頃と思われ、製作技法は銅板打ち出しで、昨年度出土した鑄造の如意輪観音とは異なります*¹。また、毘沙門天は四方を守護する四天王のうち北方を守護する「多聞天」とされ、単独で祀られる際に「毘沙門天」と呼ばれることから、今回発見された懸仏が毘沙門堂に懸けられて、蠣崎氏の北方守護の役割を担っていたことが考えられます。

塚田直哉（上ノ国町教育委員会）

*¹ 大学考古学資料館 2008 『服部和彦氏寄贈資料図録Ⅱ』)